

# 学院史編纂室共同研究報告

二〇〇二年度から始まった共同研究は、とりあえず二年間を一区切りとして活動をしているが、第四期の一年目に当たる二〇〇八年度は次のテーマ・研究組織で行った。

研究テーマ	研究員
院長研究 —ランバス、 ニュートン、 ベーツ—	○神田 健次(神学部教授) 山本 栄一(名誉教授) 舟木 謙(経済学部准教授) Daniel Harald Dellming (高等部教諭) 池田 裕子(学院史編纂室)
関西学院の 戦前・戦中・戦後	○井上 琢智(経済学部教授) 神田 健次(神学部教授) 中道 基夫(神学部准教授) 田淵 結(文学部教授) 打樋 啓史(社会学部准教授) 山 泰幸(人間福祉学部准教授) 福井 幸男(商学部教授) 辻 学(広島大学大学院教授) 井戸田史子(大学図書館)

研究 W・M・ヴォーリス	○田淵 結(文学部教授) 荒山 正彦(文学部教授) 井上 琢智(経済学部教授) 加藤 晃規(総合政策学部教授) 深井 純(博物館開設準備室 教育技術主事) 山崎富美子(大学図書館) 片寄 俊秀(元 総合政策学部教授) 石田 忠範(元 本学非常勤講師、 元 一粒社ヴォーリス 建築事務所所長) 山形 政昭(大阪芸術大学教授、 本学非常勤講師) 奥村 直彦(財団法人近江兄弟社 史料館スパーバ イザー) 芹野 与幸(一粒社ヴォーリス 建築事務所)
-----------------	--

(○)印・主任研究員)

次に、本年度三つの研究チームについて、概略を報告する。

## 一 院長研究—ランバス、ニュートン、ベーツ—

これまで、ランバス、ニュートン、ベーツを中心に継続して研究してきた。神田主任研究員は、W・R・ランバスについての研究の新たな展開として、「草創期のエキキュメニカル運動とW・R・ランバス」という研究テーマで研究を進め、その研究内容について、二〇〇九年二月二日に開催された成全会（神学部の同窓会）総会及び東梅田教会創立一二〇周年記念講演会において講演を行った。なお、「草創期のエキキュメニカル運動とW・R・ランバス」については、次号の『関西学院史紀要』において論文として掲載予定である。

池田研究員は、二〇〇七年一〇月に成蹊学園で開催された全国大学史資料協議会全国研究会で「関西学院創立初期の宣教師関係資料—北米での調査・資料収集からその活用まで—」という研究報告を行い、その研究報告が同協議会発行の『研究叢書』第九号（二〇〇八年一〇月）に掲載された。

また、九〇年前に関西学院で教えていたラトヴィア人アン・オゾリンのことを『学院史編纂室便り』第二十六号で紹介したことから、駐日ラトヴィア大使館との情報交換が進み、一〇月一〇日にペーテリス・ヴァイヴァルス初代駐日大使をお迎えし、大学主催特別講演会「バルト海の真珠ラトヴィア、EUの一員」が開催された（協賛：経済学部、産業研究所、学院史編纂室）。詳細は、『学院史編纂室便り』第二十七号、二十八号にて紹介している。この件については、日本ラトヴィア音楽協会から依頼を受け執筆した原稿が、同協会発行のニュース『L'avis』第一四号に掲載された。なお、一三号には『学院史編纂室便り』第二十七号の抄録も掲載されている。

オゾリン研究に関しては、読売新聞阪神支局の取材を受け、「九〇年前のラトヴィア人教師が縁、大使が関学大で講演会、文献調査記事を外相称賛」との見出しで、『読売新聞』二〇〇八年一〇月四日朝刊二九面に掲載された。

また、『ベーツ日記』の翻刻チェックについては、昨年引き続き、デルミン研究員が取り組んでいる。

主任研究員 神田 健次

## 二 関西学院の戦前・戦中・戦後

本年度から開始された「関西学院の戦前・戦中・戦後」(第四次)は、各研究員の研究テーマ(『関西学院史紀要』第十四号参照のこと)に従って研究を進めてきた結果、以下の成果を出すことができた。

福井幸男研究員(商学部)は、研究対象であった二人の関西学院関係者のうち彭明敏先生を探り上げ、その成果を、本号の「シリーズ 関西学院の人びと」欄で「一五 彭明敏」として、公表した。また、すでに前回報告で予告したように辻学研究員(広島大学)は、『学院史編纂室便り』(第二七号)で『奉仕のための練達』登場と時局的判断」を公表した。

また、今年度新たにこの共同研究に組み入れられることになった神田健次研究員(神学部)を中心とする「関西学院の神学教育の特色と外国人留学生―戦前・戦時下を中心として―」は、昨年四月四日に韓国メソヂスト神学大学で第一回の共同学術セミナーを、十一月十七日には本学のベーツチャペルでその第二回共同学術セミナーを開催した。その成果の一部が本号に掲載された「関西学院神学部の韓国人学生たちの牧会と神学活動」である。

その他、井上による「上ヶ原移転後の教職員の住居―甲東園近隣を中心にして―」については、今年度開催された関西学院史研究月例会(六月十七日)で、磯田美子氏(本学の矢内正一名誉中学部長の長女で、本学名誉教授磯博夫人)に「上ヶ原移転後の教職員の住居―甲東園近隣を中心にして―」というタイトルで報告していただいた。この報告および当日参加された方々から、多くの有益な情報もたらされた。今後、早急にその成果をとりまとめることになる。改めて磯氏および参加者の皆さんに謝意を表します。

主任研究員 井上 琢智

## 三 W・M・ヴォーリス研究

二〇〇九年に関西学院は創立一二〇周年を迎えるが、その年はまたいくつもの周年と重なり合うことにもなる。何よりも関西学院が上ヶ原キャンパスを開設したのが一九二九(昭和四)年でありそれからちょうど八〇周年。また学院創立二〇周年を記念して立てられたランパス記念礼拝堂が五〇周年、さらに創立一一一周年記念行事のさきがけとして建築された関西学院会館が会館一〇周年という

節目のときを迎えることになる。

学院としては創立一二〇周年をスタートして一二五周年にあたる二〇一四年に盛大な周年行事を企画しておられると言うことであるが、その五年後を目指して新たな学院史の編纂とそれを通じての学院史への理解を深めてゆく営みが大いに期待される場所である。そのひとつの試みとして、数年前よりウイリアム・メルル・ヴォーリズについての学内外での関心の高まりがあり、それについて関西学院（大学）としての取り組みの姿勢が生まれつつあることをここで紹介したい。

それは学内的には上ヶ原キャンパス開設八〇周年にちなんで語られるものであって、正門から中央芝生、時計台そして甲山を望むあの光景は関西学院に属する者すべてへの誇りであり、関西学院大学のアイデンティティの原像としての大きな意義を持つものだからである。二〇世紀を代表する建築物のひとつとして数えられ、文化庁の文化財登録の指定をも受けようとする、まさにキャンパス・ユートピアとして語られるこのデザインこそ、ウイリアム・メルル・ヴォーリズが関西学院にもたらしたものであり、その意味ではこのヴォーリズによって関西学院のスクールアイデンティティが形成されたともいえよう。

ヴォーリズと関西学院とのかかわりについての評価が、学院において本格的に行われるようになったのは、学院創立一〇〇周年にあたっての歴史編纂の過程を通してであり、その予備研究のために刊行された『関西学院史紀要』創刊号（一九九一年）、および第二号（一九九二年）には、大阪芸術大学の山形政昭教授による原田および上ヶ原の学院キャンパスおよび校舎群についての広範な論考がまとめられ、また総合教育研究室におけるプロジェクトとして、ヴォーリズが関西学院上ヶ原キャンパスと同じ年に設計した神戸ユニオン教会（生田町会堂）についての研究がまとめられている（『総研論集』第一四号「神戸とキリスト教」）。それらの成果を踏まえて『関西学院百年史』（一九九七年）において学院史におけるヴォーリズの位置が論じられた。その後学院においては学院創立者ランパスの生誕一五〇周年の記念行事の一環として二〇〇四年上ヶ原キャンパス旧図書館（時計台）を会場としての展覧会『ヴォーリズの「祈りのかたち」展』を開催し、ヴォーリズ建築を中心とした学院キャンパス、校舎の変遷と、ヴォーリズの生涯についての紹介を行い、多数の入場者を迎えることができた。

このような動きを受けて、関西学院においてはより組

織的なヴォーリズ研究推進の重要性が認識されるようになり、二〇〇八年度学院史編纂室における共同研究のひとつとして「ヴォーリズ研究」（主任研究員 田淵 結）が取り上げられることになった。その共同研究は、学院史編纂室所蔵の歴史的資料の分析や、これまで学内において適時おこなわれてきた研究の成果を踏まえての、今後の学院におけるヴォーリズ研究の方向性を模索するものであり、その成果としては例えば二〇〇八年に滋賀県立近代美術館において行われた「ヴォーリズ建築の100年」展にも学院として積極的に協力をし、学院史編纂室所蔵史料および上ヶ原キャンパス創立八〇周年を記念して学院に寄贈された一九二九年当時の上ヶ原キャンパス模型などを出展し、また同展示会中に行われた講演会企画として関西学院上ヶ原キャンパスについての講演が田淵によって行われている。さらに九月には神戸女学院と関西学院上ヶ原キャンパスを会場として、日本ヴォーリズネットワークによる年次大会におけるヴォーリズフォーラムでのパネラーとして、さらに上ヶ原ランバス記念礼拝堂で行われた礼拝を含むプログラムの企画者として田淵が協力している。

このような取り組みについて学外からの評価も徐々に与えられることとなり、そのひとつの動きとして財団法人近

江兄弟社との間に学術協定締結が行われることとなった。これは、近江兄弟社が近江八幡市に構えるヴォーリズの旧宅であり現在のヴォーリズ記念館となっている建物に所蔵する、ヴォーリズ来日直後からの活動の膨大な記録の調査、分析、保存についての学術的な協力を関西学院大学に求められたものであり、二〇〇八年に大学評議会の承認を得てその協定は発効した。

これは大学と近江兄弟社との間の協定であり、関西学院大学としては、その具体的な研究活動を推進するために、二〇〇八年度においては学長特別施策費のうちから二〇〇万円をこれに計上し、その活動推進のための予備調査および実験的な取り組みを進めることになったが、実際的には学院史編纂室の共同研究の内容と密接に連携するものであることから、その研究作業の展開にあたっては学院史編纂室が全面的な協力的体制をとりつつ進められることとなった。

次年度以後についてであるが、関西学院大学はこのようなヴォーリズ研究を今後も積極的に推進することの重要性を認め、二〇〇九年度から三年間にわたって「W. M. Vorles」に関する総合的研究」を学長指定研究とし、研究の推進を図り、同時に学内に「W. M. Vorles」に関する総合

的研究プロジェクトセンター (Comprehensive Research Project Center on W.M.Vories) (研究代表者 田淵 結 教育学部教授) の設置が研究推進機構によって認められ、いよいよ二〇〇九年四月より組織的に、本格的なヴォーリス研究が開始されることとなった。

ヴォーリスキャンパスに過ぎず関西学院関係者としては、ヴォーリスの存在は、毎日の働きの場での触れ合いのなかで日常的に、ある意味無意識的に当然のように行われていることであつたがゆえに、それを独自の研究の対象、課題として取り上げることがなかつたということが大きかつた。しかし、今回関西学院大学が主体的に、かつ組織的総合的にヴォーリス研究への取り組みを行うことにより、このヴォーリスキャンパスを通じて形成されてきた自らのアカデミック・アイデンティティへの理解を深め、かつ全国あるいは世界的な意味でのヴォーリス研究の拠点センターとしての役割、位置づけを担うことへの姿勢を整えることを大学のひとつの使命として明確化すること、それがまた創立一二〇周年、さらに上ヶ原キャンパス開設八〇周年を記念する年に開始されることの意義は非常に大きいものと思われる。

主任研究員 田淵 結